「なぜバビロンは滅んだのか」　イザヤ書 47 章 1-15 節

2024.7.28　礼拝

序論）

今日の箇所はユダ王国を滅ぼしたバビロンの滅亡の預言となっています。

まずは、バビロンのことを少し紹介します。バビロンこと、新バビロニア帝国はこの図の通り、イスラエル周辺諸国からシリア近郊にいたる地域を支配していた国です。

以前も話しましたがバビロンの都（図２）を取り囲んでいた城壁は高さが 12 メートル、壁の厚さは 8 メートルもあり、全長 18 キロメートルにも及ぶ鉄壁の城塞としでした。

そして、その城塞都市の中にはユーフラテス川が流れており、有名な建造物としては伝説としてバビロンの空中庭園と呼ばれるネブカドネツァルが王妃のために建てた絢爛豪華な庭園があり、さらにはこの図にあるようなバベルの塔のような非常に高い塔が立っていたようです。

そのため、このバビロンに住む人たちは自分たちこそ特別な存在であると思い上がっていました。

今日の箇所で神様はそんなバビロンに対しての裁きを語られています。

１）　復讐をする【主】

そもそも、なぜ神様はバビロンを滅ぼされたのでしょうか。それは神の民イスラエルの代わりに【主】がバビロンに復讐をするためでした。3 節を読みましょう。

47:3b わたしは復讐をする。だれ一人容赦しない。」

【主】はここで明確に「わたしは復讐をする。」と言われていますね。でも、思い出してください。そもそも、なぜイスラエルの一部である南ユダ王国はバビロンに滅ぼされたのでしょうか？　そう、彼らが【主】に背き、罪を犯していたからです。北イスラエル王国と同様に南ユダ王国の人たちも偶像礼拝をし、【主】の前に罪を犯していました。だから、【主】はバビロンを使って彼らを攻め、人々をバビロンの捕囚の民とされたのです。いうなればバビロンは【主】の裁きの杖となってイスラエルを滅ぼしたのです。では、なぜ、今度はバビロンが滅びなければいけなかったのでしょうか。【主】は 6 節でこのように言われています。

47:6 わたしは、わたしの民を怒って、わたしのゆずりの民を汚し、彼らをあなたの

手に渡したが、あなたは彼らをあわれまず、老人にも、ひどく重いくびきを負わせた。

確かに【主】のさばきの一環としてバビロンはイスラエルを攻め滅ぼしました。でも、それは、バビロンがイスラエルの人たちを非情に扱って良いということではなかったのです。【主】はイスラエルをバビロンの手に渡しながらも、彼らが【主】の民に対して無慈悲な重労働を課すことを望んではおられなかったのです。

しかし、バビロンはイスラエルが【主】の民であることを一切考慮せず、無慈悲かつ無遠慮に彼らを苦しめたのでした。だから、【主】はイスラエルの復讐としてバビロンを滅ぼすことをお決めになったのです。

そして、そのバビロンが滅びる様子を、今まで誰にも侵されることがなかった乙女が、奴隷にされ、裸にされ、蹂躙されると【主】は表現しておられます。それが 1 節から 3 節の前半の部分です。

47:1 「おとめ、娘バビロンよ。下って行って、土の上に座れ。娘カルデア人たちよ。王座のない地面に座れ。あなたはもう、優しい上品な女と呼ばれることはないからだ。

「おとめ、娘バビロン」という呼びかけが、バビロンが今まで敵に侵略されることがなかったことを表しています。。

47:2 ひき臼を取って粉をひけ。ベールを取り去り、裾をまくってすねを出し、川を渡れ。

「ひき臼を取って粉をひく」のは奴隷の仕事です、貴婦人がしていたベールを取り去り、裾をまくって川を渡るというのも、奴隷のような身分の低い立場に落ちぶれるということを表現しています。そして、3 節

47:3b あなたの裸はあらわにされ、恥もさらされる。

つまり、処女が犯されるように、バビロンが敵に蹂躙されつくされる。ということです。栄華を極め、鉄壁の城壁を持ち、女王のように振る舞っていたバビロンは、【主】の復讐によって、完全に落ちぶれてしまうのです。

【主】は神の民を打たれることがあります。しかし、その神の民が不当に扱われることを良しとされないお方なのです。そして、【主】の時がきたならば、私達の代わりに【主】ご自身が復讐をしてくださるのです。

私達は自分たちが不当に苦しめられたり、虐げられたりすると、自分たちの力でやり返したい、なんとかこの現状を打開したいと思います。でも、復讐は【主】がしてくださいます。だから、私達は自分のちからで復讐をしようとするのではなく、【主】に委ねることが大切なのではなのです。ローマ人への手紙には、このように書かれています。

ローマ 12:19 愛する者たち、自分で復讐してはいけません。神の怒りにゆだねなさい。こう書かれているからです。「復讐はわたしのもの。わたしが報復する。」主はそう言われます。

みなさん、【主】は私達の代わりに復讐をしてくださるお方です。ですから、私達は自分の怒りや悲しみを【主】に委ね、【主】に信頼して、【主】の時を待ちましょう。

２）　思い上がりを打ち砕かれる【主】

次にバビロンが滅ぼされる 2 つ目の理由は、彼らが非情に驕り高ぶっていたからです。8 節と 10 節を読んでみましょう。

47:8 だから今、これを聞け。楽しみにふけり、安心して住む女よ。心の中で、『私だけは特別だ。私はやもめにはならないし、子を失うことも知らなくてすむ』と言う者よ。
47:10 あなたは自分の悪に拠り頼み、『私を見ている者はいない』と言う。あなたの知恵と知識、これがあなたを迷わせた。だから、あなたは心の中で言う。『私だけは特別だ。』

ここに 2 つの驕り高ぶりが指摘されています。一つは自分たちの楽しみや安心は決して失われることがない。という思い上がりです。

8 節の「私はやもめにはならないし、子を失うことも知らなくてすむ」とありますが、「やもめ」というのは夫を失った人ですよね。バビロンにとって夫とは、自分たちの王のことであり、彼らは、王は絶対負けないと思っていました。また、「子」とはバビロンの人々が大切にしていた財産だったり、バビロンの国民自身のことだっ

たりしますが、そういったバビロンの宝や人々も決して傷つけられることはないと思い上がっていたのです。
　さらに**10節をみる**と『私を見ている者はいない』とうバビロンの思い上がったことばが書かれており、これはつまり、自分たちの悪事を見張り、それを正す存在などいない。という高慢をこのことばは示しています。バビロンでは、感じで書くとこのようになる占星術や数秘術などが盛んでした。これは現代でいうところの天文学や数学です。彼らはこういった知識によって頑丈な城壁や高い塔などをつくっていたのです。でも、そのような知識をもっていたからこそ、彼らは自分たちの罪をさばくお方がいることを見失い、謙遜にへりくだった歩みをすることが出来なかったのです。

　現代の多くの人も、科学が発達した現代において神なんていらない、神を信じるなんてバカバカしいことだといいます。でも、それはバビロンが犯していた高慢の罪と同じ罪を犯していることになるのです。

　なによりもバビロンは自分たちのことを『**私だけは特別だ。**』と言っていました。これは直訳すると、『**わたしだけで、他にはいない**』となり、この言い方は【主】が46章9節で『**わたしが神である。ほかにはいない**』といった言い方と同じ言い方になります。つまり、バビロンは自分たちを唯一の神様と同じ立場においていたのです。だからこそ、神様はバビロンを滅ぼされたのです。

　皆さん、私達がもっている楽しみや安心は決して永遠のものではありません。また、私達が頼りにしているこの世の知恵も、決して私達を神にするものではありません。どんなに豊かさを持っていたとしても、どんなに知識を持っていたとしても、私達が驕り高ぶって良いことにはならないのです。
　だから、私達はへりくだって歩むべきなのです。なぜならば、私達が自分で自分を高めようとしなくても、【主】が私達を高めてくださるからです。ペテロの手紙　第一にはこのように書かれています。

ペテロの手紙　第一
5:5 同じように、若い人たちよ、長老たちに従いなさい。みな互いに謙遜を身に着けなさい。「神は高ぶる者には敵対し、へりくだった者には恵みを与えられる」のです。
5:6 ですから、あなたがたは神の力強い御手の下にへりくだりなさい。神は、ちょ

うど良い時に、あなたがたを高く上げてくださいます。

自分で自分を高くしなくても、【主】は御前でへりくだるものを高くしてくださいます。だからこそ、私達はいつも【主】の前にへりくだって歩みましょう。
【主】は私達がどのように歩むかを見ておられます。

３） バビロンが頼っていたものの無力さ

そして、最後、12 節から 15 節は皮肉的にバビロンが頼っていた呪術の無力さを【主】は語られています。

47:12 さあ、若いときからの使い古しの呪文や多くの呪術を使って立ち上がれ。あるいは役立つかもしれない。脅かすことができるかもしれない。
47:13 助言する者が多すぎて、あなたは疲れている。さあ、天を観測する者、星を見る者、あなたに起こることを新月ごとに知らせる者を立たせて、あなたを救わせてみよ。

「呪文や呪術を使って立ち上がれ、天や星や月をみる者にあなたを救わせてみよ」と【主】はいわれていますが、これは皮肉ですね。バビロンはこれらを盛んにしていましたが、こういった占いや呪術では決して、【主】のさばきから救われることはないのです。そのことが明確に語られているのが続く 14，15 節です。

47:14 見よ。彼らは刈り株のようになり、火が彼らを焼き尽くす。彼らは自分のいのちを炎の手から救い出すこともできない。これは身を暖める炭火でもなく、その前に座れる火でもない。
47:15 あなたが若いときから仕え、取り引きしてきた者たちは、このようになる。彼らはそれぞれ自分勝手に迷い出る。あなたを救う者は一人もいない。」

「彼らは自分のいのちを炎の手から救い出すこともできない」「あなたを救う者は一人もいない。」といわれているように、この世の偶像やこの世の知恵、力は【主】の裁きから救いだすことはできないのです。【主】のさばきから救い出すことができるお方は【主】イエスキリストのみです。
だからこそ、私達はたとえ今、どんなに栄えていたとしても、どんなに知恵をもっていたとしても、キリストによる救いなしに永遠の平安を持つことなどできないのです。

まとめ）

まとめます。みなさん、なぜバビロンは滅んだのでしょうか。

それは【主】がイスラエルの代わりに復讐をなされたからです。復讐は【主】のものです。だから、どんなに理不尽や悲しみを経験したとしても、自分でやりかえすのではなく、【主】にその心の怒りや悲しみを委ねましょう。

【主】は、【主】が定められた時に、必ず正しい裁きをしてくださるお方です。

また、バビロンが滅んだ2つ目の理由は、彼らが【主】の前に驕り高ぶっていたからです。彼らは自分たちこそが唯一ではあり、自分たちと比肩するような存在は他にはいないと思っていました。彼らは様々な偶像礼拝をしていましたが、結局は自分を神にしていたのです。

しかし、バビロンのように成功していたとしても、天文学や数学のような様々な知恵をもっていたとしても、それらは【主】の裁きから人を救うことはできません。人は、まことの神様の前ではへりくだるしかないのです。

そして、【主】はへりくだるものに、恵みと報いを与えてくださいます。

バビロンが高ぶった要因の一つとして、彼らは自分たちの行いを見張り、自分たちをさばくような存在はいないと思っていました。

でも、【主】はちゃんと見ておられるのです。だからこそ、【主】の前にへりくだるものとなりましょう。

そして、【主】のさばきから私達を救い出すことが出来るお方は【主】イエスキリストお一人しかいません。この世のものは【主】のさばきの前には無力なのです。だからこそ、へりくだりつつ、この世の知恵や力ではなく、【主】イエスキリストにより頼む者となっていきましょう。

それこそが、永遠の平安を持つ唯一の方法です。